昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要　Vol. 24　11～31（2015）

〈論文〉

鳥居龍藏の少数民族調査に関する研究手法
――ミャオ族調査を事例として――

田畑　久夫

Research Methods of Ryūzō Torii in Surveying Ethnic Minorities:
Survey of the Miao People as an Example

Hisao TABATA

In this paper, we have reviewed Ryūzō Torii's survey of the Miao people in order to examine his research methods in surveying ethnic minorities. His unique methods have not been established as a standard yet. Results show that prior to conducting a survey, Torii performed a preliminary study to assess knowledge and information pertaining to the target ethnic group and survey region. Upon completion of the preliminary study, he then traveled to the survey site. Other aspects of Torii's research methods serve as a model for modern field surveys, such as how he summarized his survey records onsite. For the above reasons, Ryūzō Torii can be considered as a pioneer of ethnic minority surveys in Japan.

1. 問題の所在

鳥居龍藏（1870-1953 年）は，研究生活の大半をフィールドサーヴェイ（野外調査，現地調査）に費した，わが国では数少ない研究者の１人といえよう。しかも，とりわけ海外（当時植民地であった朝鮮半島，台湾を含む）調査に関しては，多くの対象地域が日本人研究者としては最初に訪問した地域であった。さらに写真撮影や人体測定などにみられる如く，当時としては最新の科学技術を導入した研究者でもあった。すなわち，かような意味において，鳥居龍藏は，最初に科学的な研究手法を駆使して海外でのフィールドサーヴェイに従事した先駆者であると位置づけることができよう。加えて，鳥居龍藏が実施した海外でのフィールドサーヴェイの多くは，日本人は勿論のこと外国人によっても，いわゆる Terra Incognita（未知の土地）であった。それ故，鳥居龍藏の海外でのフィールドサーヴェイは，研究的な性格を有するが，あるいはそれ以上にエクスプロラー（explorer 探検家）的な性格も兼ねていたのであった（田畑 2014b）。

かように鳥居龍藏は，専門とする人類学および考古学を中心とした学問分野 *1 において非常に数多くの研究業績を残した研究者であるが，従来学問的評価に関しては無視あるいは等閑視される傾向が強かった。理由としては，とりわけ鳥居龍藏が実施した海外調査での地域が，例えば，満州 *2，あるいは台湾などに代表されるように，旧日本軍が占領あるいは植民地とした地域であること

などから，戦争協力者であるというレッテルが一部の研究者間によって貼られたことに起因すると推察できる*3。かようなことから，多くの研究者は鳥居龍藏の研究業績や学問的評価については，上述したように，無視あるいは等閑視され続けてきたのであった*4。筆者はかかる点を克服したく考え，従来から微力であるが拙著（田畑 1997，2007）あるいは論攷（田畑 2013a，b，2014a，b など）を刊行または発表してきた。本稿はこれらの拙著および論攷を受けて，鳥居龍藏の少数民族調査に関する研究手法の特色について，検討・分析を行なった。とくに，鳥居龍藏の数ある調査・対象の中で少数民族調査の研究手法に論点を焦ったのは，以下の理由が存在するからである。

第 1 点として，鳥居龍藏のライフワークは，一般には著書として結実しなかったが「遼の文化」であると看做されている（岡崎 1976：673）。かかる「遼の文化」に関しては附録である図譜（鳥居 1936）のみが既に刊行されている。筆者は，これに対して日本民族および文化の起源，つまり源流に関しても，「遼の文化」同様，研究者としての生涯をかけての研究を実施したと指摘したことがある（田畑 2007：3）。この点を若干補足すれば，上記の「遼の文化」の研究は，最終的には日本民族および文化の源流研究に収斂していくのではないかと推察できるからである。鳥居龍藏の少数民族調査はまさにこの点と大いに関連を有しているからである。それ故，鳥居龍藏は，本稿で取り上げ論を展開するミャオ族を筆頭に，台湾の少数民族（原住民族，先住民族），満州族，蒙古族など日本列島周辺に分布・居住する民族集団に強い関心をもち，比較・検討を行なうのである。以上から，少数民族研究は，鳥居龍藏にとっては研究上のキーワードの 1 つといえるのである。

第 2 点として，鳥居龍藏の海外における少数民族研究は，既に指摘した如く，わが国における少数民族研究の先駆的な研究といえる。しかも，その研究は，筆者が現地において確認したが，詳細かつ正確なものであった。この点は，ほぼ同地域を同年代に調査を実施したホッジィ（Hosie 1890），デーヴィス（Davis 1909）やクラーク（Clarke 1911）などの外国人研究者の著作の記述などからも伺える。

以上述べたように，鳥居龍藏の少数民族研究には 2 つの大きな特徴がみられるのである。その中でも，とくに第 2 点の少数民族調査が詳細かつ正確に行なえた理由を解明することを本稿の主目的とした。かかる点を解明することにより，従来から無視あるいは等閑視され続けてきた，鳥居龍藏の研究者としての学問的評価を問う契機としたいと考えたからである。

2. ミャオ族調査の位置づけ

ミャオ族は，西南中国の一角を占める貴州省およびその西側に隣接する雲南省を中心に，湖南省さらには国境を越えてインドシナ半島北部に位置するベトナム（ベトナム社会主義共和国），ラオス（ラオス人民民主共和国），タイ（タイ王国）などにも分布・居住している*5。かかるミャオ族に注目し，日本人として最初にミャオ族の集落を訪問し，科学的な研究手法を用いて調査を実施したのが鳥居龍藏であった。かかる鳥居龍藏の影響を受けたためか，中国の少数民族の中でもミャオ族は研究者は勿論のこと，一般の人びとの間にも熟知されている民族集団といえる。つまり，日本列島周辺に分布・居住している満州族や蒙古族などの民族集団と異なり，ミャオ族は距離的にも近いとはいえないのに比較的知名度が高いのである*6。

かように，ミャオ族は，日本人にとって認知度の高い民族集団といえる。ミャオ族がとくに注目され，関心をもたれるようになったのは照葉樹林文化論との関連においてであった。1966 年中尾佐助が著書（中尾 1966：59-76）の中で照葉樹林文化論を提唱した直後，照葉樹林文化論は，第 2 次

世界大戦後のわが国における人文科学上最高の学問的成果であると称された作業仮説であった[*7]。かかる照葉樹林文化論において，ミャオ族はその核心部（core area）である「東亜半月弧」と名付けられた地域に居住する代表的な民族集団だからである。それ故，ミャオ族の伝統的な生活様式（genre de vie）の多くがわが国のそれとの類似点が多く認められる。そのことから，日本文化さらには日本民族の源流の解明に大きく寄与するものと推察されるからである。鳥居龍藏も，西南中国を中心に分布・居住するミャオ族は，日本文化および日本民族の形成に関連していると推察し，単独でミャオ族の集中地域に出かけるのであった[*8]。鳥居龍藏は，なぜかかる関連をミャオ族に求めたのであろうか。以下で検討していくことにする。

鳥居龍藏がミャオ族に興味・関心を抱くようになったのは，次に述べるような理由からであった。鳥居龍藏は，西南中国において単独でミャオ族調査を実施する以前に，台湾での調査に従事した。台湾調査は明治 29 年（1896）から明治 33 年（1900）にかけて合計 4 回行なわれた[*9]。台湾調査は自らの意志で実施したのではなく，恩師である坪井正五郎の依頼によった[*10]。すなわち，日清戦争（明治 27-28 年，1894-95）後，清国より割譲された台湾に関して，東京帝国大学理科大学教授会が開催され，動物・植物・地質および人類を各々専攻する 4 教授をリーダーとして派遣する総合調査を行なうことが決議された。当時の人類学教室の主任教授は上記の坪井正五郎であった。ところが坪井正五郎のみがある事情のため，台湾に出張して調査することができなくなった。紆余曲折を経て，坪井正五郎の下で標本整理係を担当していた鳥居龍藏が代理として台湾に出かけることになった。しかし鳥居龍藏は，標本整理係という坪井正五郎の私的な身分であったので，調査においては種々困難が生じることが予想された。そこで坪井正五郎は，鳥居龍藏を東京帝国大学理科大学の雇員という肩書きで正式の職員とし，東京帝国大学から「人類学調査のため台湾に出張を命ず」という辞令をもらった[*11]。かように，鳥居龍藏の身分を東京帝国大学職員としたのは，台湾調査の派遣主体が東京帝国大学理科大学であること，さらには他の動物・植物・地質の 3 分野ではそれぞれの主任教授が調査に従事するため，多少とも代理とはいえ，他教授との釣合いを考えたからであると推察できる。

以上論じたような経緯を経て，鳥居龍藏は台湾において人類学を主体としたフィールドサーヴェイを行なった。ここでいう人類学的調査とは台湾に居住している原住民族あるいは先住民族と称されている民族集団を中心としたものであった[*12]。これらの民族集団を調査するために，鳥居龍藏はその後の海外におけるフィールドサーヴェイにおいても同様の研究手法を用いるのであるが，以下のような作業を行なった。

かかる作業とは，調査対象に関して，国内で入手しうるかぎりの内・外の文献を渉猟することを常としていた。台湾調査でも，出発前に東京帝国大学の図書館や坪井正五郎の研究室などに所蔵されている著書や論文を読破する作業を行なった。その渉猟した書物の中に，ラクーペリー（de Lacouperie）の “Formosa Note” や “The Languages of China before the Chinese” などの専門書があった。とくに前著の中で，次のように書かれている記述に関心をもった。その関心を引かれた記述とは，台湾北部の山上一帯を中心に分布・居住している黥面蕃[*13]と称される集団が，西南中国を中心に分布・居住してミャオ族の分派集団（亜集団）と同一民族に違いないと結論づけている点であった（鳥居 1926　鳥居 1976b：232）。この点について鳥居龍藏は，実際に台湾に居住する民族集団を調査してみると，上述のラクーペリーの説が該当するという印象を強く感じた。そこで，かかる事実を確認すべく，ミャオ族の居住中心であ

る西南中国に単独で出発したのであった。

かように，ミャオ族に強い関心を有したのは，前項で論じた如く，鳥居龍藏の学問的関心が日本民族および日本文化の源流の解明であることと，大いに関連するからであった。つまり鳥居龍藏は，日本文化の担い手である日本民族が他の民族集団の血が混ざっていない純血種であるという立場を放棄し，北方および南方の両方面から，それぞれ日本列島に渡来した複数の民族集団によって形成されたと看做した。鳥居龍藏がかかる渡来集団の中心と想定したのは，自らが提唱する「固有日本人」*14 と呼ぶべき集団である。かかる集団は遺跡およびそこから出土する遺物などの類似から，「朝鮮半島を経てあるいは沿海州辺から日本海を渡って日本に来たものと思われる」（鳥居 1925 鳥居 1975：386）と推察した。以下の事実はその後の鳥居龍藏の研究によってより明確になるのであるが，かかる「固有日本人」にインドネジアン*15やインドシナ民族*16などの南方系の集団が加わり，日本民族が形成されたと看做した（鳥居 1925　鳥居 1975：386）。つまり，本稿においても後段で詳細を論じる，日本民族の形成において，ミャオ族が大いに関与していると看做すのである。そしてその事実を確認すべく，ミャオ族が集結している最大の地域である西南中国に出かけたのであった。

以上論じたように，鳥居龍藏は，何か疑問が生じた場合，専門家に質問したり，書物などを調べるのではなく，出来うればその疑問が生じた場所すなわち現場に出かけ，そこで直接自らの眼で確かめることで疑問点を解決することを基本としていた。かような研究手法，すなわち何か疑問点が生じると，国内・外を問わず，その点を解決すべく現地に出かける手法は，フィールドサーヴェイに基づく研究を実践している学問分野においては，よく見受けられる学問的態度である。かかる研究手法は，一般に現場中心主義あるいは実証主義的観点と称されることが多い。わが国において，この研究手法を最初に確立したのは鳥居龍藏であると推察される。かかる意味において，鳥居龍藏は，わが国における海外でのフィールドサーヴェイの先駆者といえよう。その最初の本格的なフィールドサーヴェイが西南中国に主として分布・居住するミャオ族調査であった*17。

3. ミャオ族調査の動機とその成果

1）動機

前項で論じたような動機，つまり台湾の原住民族あるいは先住民族の１つである黥面蕃が，西南中国に主として居住するミャオ族と同一系統に所属するか，否かを自らの眼で確認すべく，単独で西南中国に出発したのであった。かかる点について鳥居龍藏は，前述したラクーペリーの著作などを通じて，「一層西南支那調査の必要を感じたのであって，台湾における人類学の比較研究は，フィリッピン諸島，インドネジアン諸族のそれは，もとより直接に必要であるが，また間接に前岸の苗（Miao），傜（Yao）等の印度支那族のそれも比較せねばならぬ」（鳥居 2013：177）と述べ，ミャオ族を筆頭とするインドシナ民族の調査の重要性を指摘している*18。かかるインドシナ民族の中でも，とくに何故ミャオ族が調査対象として選ばれることになったのであろうか。この点については，

> 先年自ら台湾に行って生蕃*19を調査した結果，彼ら蕃族と現今西南（西南中国のこと―筆者註）に住する苗族のある者とが，人類学上密接な関係をもって居るのではないかという疑問を生じさせたので，実施苗族の境を踏んでその状態を調査し，以てこの疑問を解こうというのが主であって……（鳥居 1926　鳥居 1976b：232）。

とミャオ族調査を実施する動機を端的に述べている。

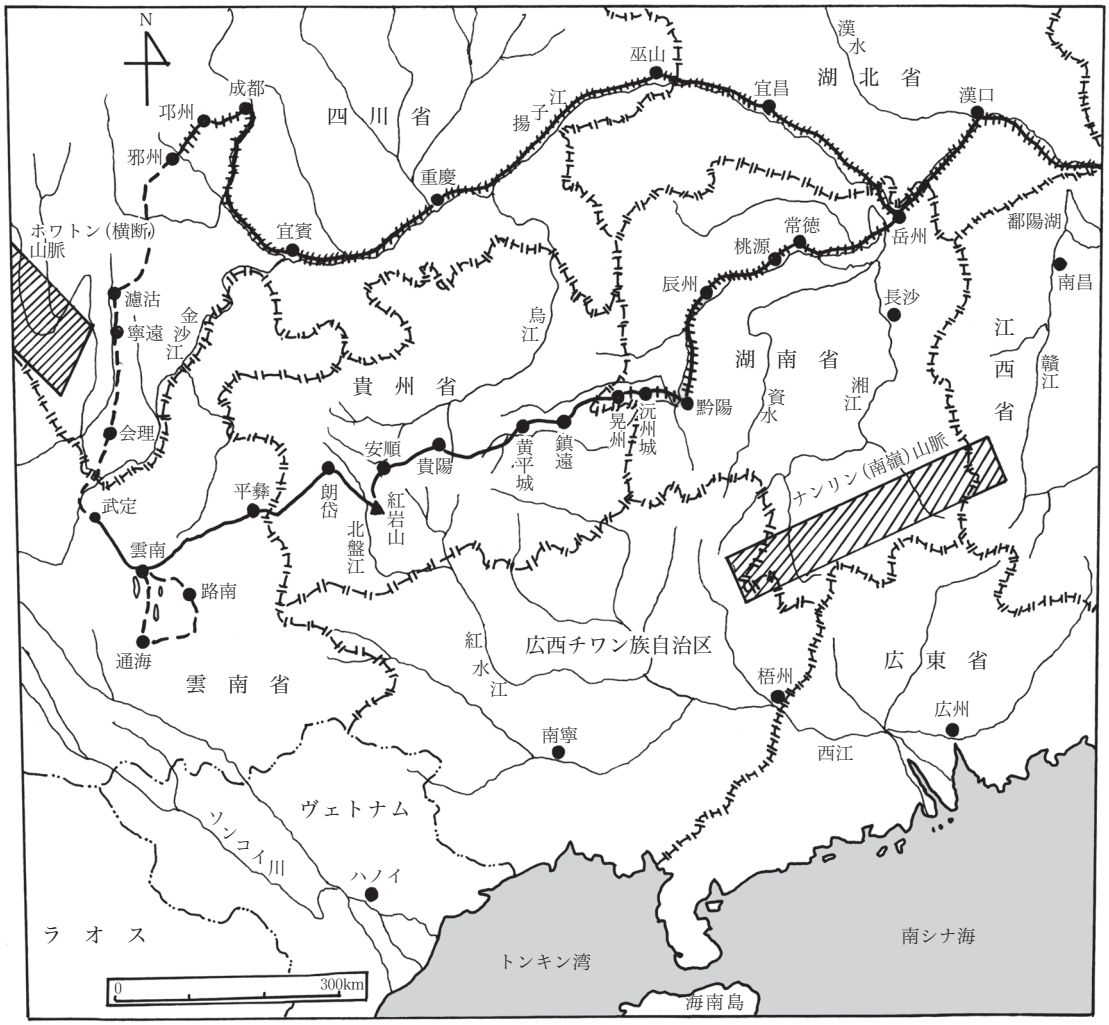
鳥居龍藏は，遼東半島に出かけ調査した経験を有している。しかし，本格的な中国でのフィールドサーヴェイはミャオ族調査が最初であった。当時鳥居龍藏は，既に指摘したように，身分が東京帝国大学助手であった。そのため，自らの強い希望とはいえ，自由に西南中国に出かけることはできなかった。東京帝国大学に調査の申請書を提出し，その許可を得る必要があった。そこで鳥居龍藏は，上司である東京帝国大学理科大学理学部人類学教室主任教授の坪井正五郎を通じて，かかる申請書を提出した。申請書は理科大学の教授会での審議の結果，許可された。

かような経過で調査の申請許可が下った。本来ではミャオ族など少数民族に関連する著作や論文を渉猟しなければならないが，漢籍史料には記録がみられるものの，関連する外国諸文献は非常に少なかった。そこで，当時支那通として著名であった岸田吟東京帝国大学文科大学教授の下に出向き，中国全般について種々懇切な教示を受けた。かように中国に通じている研究者を訪問したのは，中国では団匪の乱（義和団事件 1898-1900 年）が鎮圧されてからまだ数年しか経過しておらず，治安などについて問題があったからである。そのため，中国では種々の機関と連絡する必要があった。また東京地学協会[*20]幹事長長岡護美子爵から在中日本公使や総領事など政府関係者の人びとに宛てた紹介状をもらった。さらに，調査の携帯として，当時としては最新式の身体計測器，写真機械，乾板などの器具や調査用紙などを備えた。かように，東京では出来るかぎりの準備をして出発したのであった。

2）行程とその成果

東京を出発したのは明治 35 年（1902）7 月であった[*21]。神戸からは船に乗船した。最初の大陸の上陸地点は上海であった（第 1 図）。上海では岸田吟教授に紹介してもらった上海楽善堂の主人や，小田切総領事の世話になり，上海の市街地見物や近郊にある蘇州などを歴訪した。また，総領事の斡旋で日本語のできる通事[*22]（訳）1 名を雇った。この通事は今回の調査旅行の全行程に同行した。上海を含む中国は，上述したように治安が極度に悪かった。とくに欧米人に対しては「西洋鬼」，日本人に対しては「東洋鬼」と呼ぶなどして友好ではなかった。そこで鳥居龍藏は，上海に上陸すると直ちに着用していた洋服を捨て，購入したシナ服に着換えた。洋服でいるよりもシナ服を着用して国内を移動する方が無難であると考えたからであった。

上海からは揚子江を遡上して漢口に向った。漢口は，揚子江と湖北平野を南東方向に大きく湾曲してきた支流漢水との合流地点に位置している。漢口は，アロー号事件の結果，清国と英・仏・米・露の 4 ケ国との間に締結された天津条約（1858 年）により開港した。また漢口は，揚子江水系と南北の両拠点である北京と広東（広州）とを結ぶ幹線鉄道京広線の連絡点で，「九省通衢」と称された交通の要所であった。1949 年 10 月の中華人民共和国成立後，漢口は漢陽および武昌と合併して武漢となった。当時漢口には日本の領事館が設置されており，背後に展開する内陸の玄関口とでもいうべき位置を占めていた。そこで鳥居龍藏は山崎領事を訪問し，貴州省に入境してミャオ族の調査を実施したい旨を相談した。山崎領事は貴州省に入る手前の湖南省の治安がとくに悪く，先日も同省にいたイギリス人の宣教師 1 名が殺害されたほどであった。かような事情なので，ミャオ族調査は中止した方がよかろうと忠告された。しかし鳥居龍藏は，ミャオ族調査に出かける希望を強く主張し，数次にわたり調査旅行の許可を請求した。そして，やっとのことで領事からかかる調査の許可をもらうことに成功した。とくに外国人に対す



第１図　鳥居龍蔵調査コース

凡例
- 国境
- 省・自治区界
- 主要山脈
- 要河川
- 調査コース（ミャオ族居住区）
- 調査コース（ロロ族居住区）
- 調査コース（漢族居住区）

〔出所〕鳥居龍蔵（1926）「人類学上より見たる西南支那」，冨山房.
鳥居龍蔵（1976d）「鳥居龍蔵全集　第 10 巻」，朝日新聞社，219-521 頁より作成.

る治安が悪いと聞いていたので，外国人の服装よりもシナ人の服装をしていた方がよいと考えて，上海から先は購入したシナ服を着用し，頭にはシナ帽を被り，弁髪を付けることにした。また時には頭髪を剃り僧侶の姿に変身することもあろうかと考え，僧服一式も購入した。

貴州省には上海からさらに揚子江本流を遡上して四川省に入り，そこから南下して入境するコースと，本流の支流である烏江を遡上して到達するコースなどが存在した。鳥居龍蔵は，これらの両

コースを選択せず，上海の少し先で揚子江本流と合流する支流沅江を遡上して向かう，湖南路と呼ばれているコースを選んだ。理由は，湖南省沅江流域にある麻陽地方から，薪などの物資を積んで漢口に入港した船が，ちょうど積み荷を降して戻る空船があったからである。かかる船は現地で「麻陽船」と呼ばれていた。鳥居龍藏はかかる「麻陽船」に便乗することにした。「麻陽船」には他に雲南府（現昆明）に赴任する官吏*23も同乗することになった。さらに同船には，漢口で働いていた夫婦など数人の現地の人びとも乗船した。漢口出発は8月24日であった。

「麻陽船」は漢口の港を出発して少し揚子江を遡上すると，本流を離れた。そこからは小さな掘割のような小川を進んで，揚子江の遊水湖として有名な洞庭湖の入口に位置する岳州に向った。「麻陽船」は水深がとくに浅い箇所では，かつてわが国の高瀬船でも実施されていたように，船にロープを掛けて，船頭など数名が川の両岸からあるいは川に入り，船を人力で引いて遡上した。このようにゆっくりした速度で遡上したうえに，度々川岸に点在する港らしき所に停まったので，岳州までは数日間を要した。岳州で上陸し，岳州府の城内の上に聳えるかつての岳陽楼路から前面に展開する洞庭湖を一望して楽しんだ。洞庭湖は，通常では一直線に湖上を横断するが，同乗した「麻陽船」は比較的小型の船なので，湖上で強風や突風に出会うと転覆することが充分考えられた。そこで湖の途中から同湖に流入する蘆陵潭という小川に沿って常徳に出た。

常徳は『書紀』などの漢籍に登場するミャオ族の祖先とされる「三苗」の故地といわれている地方に位置している。すなわち，伝説上の時代である堯・舜の時代，さらには禹貢の初期において，ミャオ族の祖先は当地で非常に栄えていた。その後，この地に北方の黄河中流に居住していた漢族が南下してきた。漢族は先住民族であるミャオ族をはじめとする集団を征服し，ミャオ族などの集団の多くを現在の分布・居住地である，西方に位置する湖南省の山間部や貴州省に追い出したといわれている。

常徳は現在では洞庭湖畔に位置する港として，交通の便が良好なためか非常に繁栄している。しかし，一般に湖南人は排外心が強く，外国人をみると危害を加える恐れが充分に存在する。鳥居龍藏はこのことを漢口で既に聞いていた。そこで常徳に到達する直前に剃髪法衣の姿となり，湖南人からの危害を避けようとし，用意していた法衣と剃刀を出し，頭髪を剃り落そうとしていた。その時に常徳府知事が突然船を訪問して，鳥居龍藏に来意を確認した。鳥居龍藏は，これより先に進み貴州省に入境したいと伝えると，危険なので特別に護衛の兵士を付け，道中の安全を確保しようと申し出た。そこで鳥居龍藏は護衛の兵士が得られたことなどから，洋服のままで行くことにした。さらに加えて，常徳からは乗船している「麻陽船」を護衛するためにと，砲艦*24 1隻を出して道中の安全を確保してくれると約束してくれた。かように，鳥居龍藏の安全について気づかってくれたのは，上述したイギリスの宣教師殺害の事件が発生したことによると推察できた。

かくて砲艦に守られた「麻陽船」は，石細工で有名な桃源を経由して辰州に向った。辰州の直前の九谿では夜間に篝を焚いて鵜を操って漁を行なう鵜飼をみた。その様子は，わが国の長良川などの河川で実施されている鵜飼漁と類似しており非常に関心をもった*25。辰州はイギリスの宣教師がまさに殺害された土地である。それ故，鳥居龍藏は大変危険な土地であるように思われたので，これまで着用していた洋服を脱ぎ，シナ服に弁髪，シナ帽という姿に変身した。辰州に到着すると，府知事が官吏を派遣して，来意の確認に来た。かかる官吏をはじめ周囲に集まった人びとは非常に驚いた様子であった。官吏の来意の本当の目的は，

これから先に進むことは身に危険が及ぶ可能性があるので，中止するように勧告に来たのであった。驚いた理由は，鳥居龍藏の姿をみて，日本人は洋服を着用していると聞いていたが，そのような姿をした日本人が船中にいなかったからである。鳥居龍藏は官吏の忠告を無視し，先に進むことを強く主張した。その後上陸して市街を散策した。辰州の人びとは鳥居龍藏がシナ人と同様の姿をしているので，他省からやって来た役人が視察していると思い，ゾロゾロと後から付いてきた。これらの人びとは，同行している通事が吐き出す葉巻煙草の烟にびっくりしたり，鳥居龍藏が持参している蝙蝠傘をみて大いに不思議がった。このことから鳥居龍藏は，「泰西（西洋諸国のこと－筆者註）の文物は今なおここには及ばないとみえる」と，辰州の印象をもった。

9 月 20 日に辰州を出発した。出発に際して，辰州府知事は護衛の兵士 3 名を付けてくれた。これらの兵士も乗船してさらに沅江を遡上していった。9 月 22 日には浦市に到着した。浦市は常徳同様沅江水路の要所にあり，常に多くの船が停泊していた。ここから先はとくに治安が悪いことから，砲艦とは別に 1 隻の軍船を護衛のために付けてくれた。そのため，以降の航行は前後に砲艦と軍船に挟まれる形で進むことになった。また途中の浅瀬では水先案内人を雇って進むなど，かかる面での危険にも遭遇して進んだ。「麻陽船」は湖南省と貴州省の物資の集散地である洪江司を経由して，黔陽に到着した。漢口から遡上して来た比較的大型の「麻陽船」は当地が終点であった。そのため，当地まで護衛のために同行してくれた砲艦や軍船，兵士たちとも別れることになった。ただ，常徳より同行していた雲南府に赴任する官吏は，本人の希望で貴州省まで同行することになった。これで船旅は終了し，後は陸路を行くことになった。

ここまで遡上してきた沅江は水源が貴州省である。沅江のように海抜高度が高い内陸の山地まで船が往来するのは他国人にとっては大変珍しいことである。「南船北馬」という名前もこのようなことからそのように名付けられたものと思われる。つまり，北方ではどこまでも乗馬で旅行が可能である。これに対して南方では河川が到る所にあるため船の便が交通上もっとも重要といえる。かかる点こそ，中国の一大景観であるという印象を，ここまでの調査旅行で鳥居龍藏は強く感じたのだった。

黔陽の市街地は川の右岸丘陵上にあった。鳥居龍藏は，そこに行き，人びとの風俗や風景などを持参したカメラに収めた。これより先の行程は，上述した如く，陸路を歩むことになる。そのため人夫などの手配について官使に相談した。官使は，他の場所と同様に，最初は貴州省に行くのは危険であるから中止するようにと言葉を尽して忠告した。しかし，鳥居龍藏の意志が強固であることを知ると，人夫の周旋から行李の荷造りに到るまで親切に世話をしてくれた。これからの陸路はほとんどの行程が山道で，急なアップダウンの連続かつ悪路であるという。鳥居龍藏は，ある事情から明日の宿泊地までわが国の里程換算で約 15 里（60 キロメートル）進む必要があった。ところが同行の通事は，健脚でないので山道を 15 里も歩けないと申し出た。そこでやむなく，通事用に駕籠を造り，人夫 3 名で交互に担いでもらうことにした。黔陽出発は 10 月 2 日であった。

黔陽の出発は早朝であったが，出発時にここまで護衛してくれた砲艦がわれわれの前途を祝して 3 発の号砲を打ってくれた。その音を後にして，鳥居龍藏は急な山道を同行の雲南府に赴任する官吏や護衛の兵士と共に徒歩で，また通事は駕籠に乗って進んだ。道程はアップの連続で山頂に達した。山頂には煉瓦造りの大門が建てられていた。その大門には「滇黔孔道」*26 という扁額が掲げてあった。大門を経過すると下り坂となった。出

発が早かったので，甘渓坪という戸数300戸ぐらいの集落に到着したのは午前7時30分ごろだった。かかる集落は街道筋の宿場町のように，飲食店や休息のための宿屋らしきものが多い。峠下という交通上の条件がこれらの職種に適しているのであろうと推察される。しかし鳥居龍藏は先を急ぐので，ここには立ち寄らなかった。昼食は羅薄河で取った。ここも前述の甘渓坪に類似した飲食店の多い集落であった。鳥居龍藏は1軒の飲食店*27に入り，手短かに昼食をすますと，山道を歩き続け桃樹溥に着いた。桃樹溥には兵士が10数名鳥居龍藏を迎えるために待機しているのに出くわした*28。本日の宿泊地である沅州城の府知事の指図によるものであった。本日は沅州城に宿泊するために道中を急いだのであった。

沅州城は沅江の上流に位置し，その河畔に築かれていた。城壁は煉瓦で造られ，その上に層楼が建てられていた。城内の一角には遠方からもみることができる七重の塔も建てられていた。このような城郭は，この地方にみられる典型的なもので，その後もあちらこちらでみることができた。鳥居龍藏は沅江に到着すると直ちに衛門を訪問した。府知事を表敬訪問するためであった。府知事は貴州省安順が出身地であった。安順はミャオ族の集落地の1つであるので，ミャオ族に関する詳しい情報をはじめて入手することができた。沅州城でも同様に市街を散策を兼ねて見学した。鳥居龍藏はシナ服を着用していたので，住民たちは誰が日本人であるか分からないという状態であった。

翌日には沅州城を離れたが，これまでと同様に護衛のために兵士を付けてくれた。ここから先は，これまでと同じ急なアップダウンを繰り返す山道が連続した。10月4日*29には湖南省の最後の集落である晃州に着いた。晃州はかの王昌齢や李白らの文化人が流された土地であった。ここを過ぎれば目的の貴州省に入境することになる。翌10月5日早朝晃州を出発し，20数里（約10キロメートル）進むと貴州省に入った。鳥居龍藏は，過日湖南省に入ったとき，その風俗が隣接の湖北省と大いに変化していることを感じていた。貴州省に入ると，まだ入境してからわずかしか進んでいないが，同様に風俗が湖南省と著しく異なっているのに気付いた。それは，とくに女性の頭髪で，日本では東北地方などにみられるオバコと称するような髷を結い，顔には紅粉（白粉）をつけている様子はなかった。

貴州省に入境し5里（約2.5キロメートル）ばかり歩くと黄頭店という集落に着いた。黄頭店は街道沿いの小集落で戸数は30戸ばかりであった。しかも，ほとんどの家が飲食店を兼ね，典型的な宿場町という感じがした。しかし，販売している飲食物は食欲をそそるものは何もなかった。そこで茶だけを注文して休息した。そのとき，現地の女性と容姿や体格が明らかに異なる1人の女性が眼についた。ミャオ族の女性であった。鳥居龍藏は，はじめてミャオ族の女性に遭遇したので大いに興味をもち，次のように観察した。

> 目に着いたも道理，紛う方なき苗族婦人であった。年のころは30歳前後で，身長は低い方であるけれども，凸額で眉尻太く，目尻下がって鼻は隆くない。而して鼻柱が窪んで居るように見えた。顔面はやや扁平であって，頬骨高く，口大きく，頭髪黒くして皮膚は黄色である。

このように，非常に詳細に描写している。あまりにも鳥居龍藏が凝視したので，あわてて女性が姿を隠したほどであった。幸い貴州省に入境するとその初日に，今回の調査旅行の主目的であるミャオ族に出会え，大変嬉しく「いよいよ苗地に入って来たという感じを高めて，一種意気の緊張するを覚えるのであった」という第一印象を得た。

さらにその先の南世舘では，熟苗らしき2人の

女性に会った。しかし女性は，先程のミャオ族の女性とは容姿などが若干違っているように思った。すなわち，ミャオ族なのであるが，当地方の漢族の女性にみられるように白布で頭部を巻いていたのであった。しかし，顔付きは丸顔で，扁平な容姿はミャオ族の特徴をよく表わしていた。それ故，かかるミャオ族はシナ化した熟苗であろうと推察した。この女性のように，その後の行程ではシナ化したミャオ族が随所にみることができた。鳥居龍藏はミャオ族調査が主目的であるので，かようにミャオ族に注目していたのであるが，遭遇するシナ人の容姿も一般のシナ人と異なっているのに気付いた。すなわち，当地のシナ人も，ミャオ族に近い容姿をした者がよくみられるからである。シナ人が当地のミャオ族と結婚したことなどが原因でないかと思われた。また逆に，前述のようにシナ化したミャオ族も多数みられた。これらのことは，貴州省に入ってからの新発見であった。かように，道中で出会う人びとにとくに注意を払いながら，貴州省東部の中心地鎮遠府に向った。

焦渓という小さな集落に到着すると，例によって鎮遠府から派遣された兵士[*30]が鳥居龍藏の到達するのを待っていた。さらに先の五店舘では，馬に騎乗した士官が兵士を引率して鳥居龍藏一行を迎えてくれた。これらの出迎えは鎮遠府知事の指示であった。到着した鎮遠府は沅江の川岸にある立派な都会であった。入口には素晴しい石橋がかかっており，その中央には3層楼の大門が設けられていた。このことからも，鎮遠府は西南中国有数の要所であることが理解できた。宿は一品客棧[*31]にとった。宿で休息していると衛門から派遣された兵士がやって来て，知事が無事到着したことを祝っていると告げた。鎮遠府到着は10月8日であった。

翌9日は終日市内の見学を行ない，数枚の写真を撮影した。府内の住民はほとんどシナ人であるが，旧来からの土着ではなかった。元来ミャオ族が居住していたが，政府より追放され，その後に湖南省・広西省・雲南省など近くのシナ人が移住してきたのであった。昼食は府知事より饅頭，鮑と鳥肉の汁，豚肉のカレーなどが供せられた。府知事はシナ公使の随員としてヨーロッパに行ったことがあった。そのため，西洋の食事にも通じており日本人の口に合うようにと，このような西洋料理とシナ料理の折衷したものを出したのであった。鎮遠府を出発したのは翌10日であった。出発に際して府知事から旅行用として馬1頭が贈られた。馬は貴州の馬と呼ばれ，日本の馬とは異なり山道に慣れており，アップダウンの石段でも平気で昇降した[*32]。そこで，鳥居龍藏はかかる馬に乗って旅行することにした。行程には乗馬した士官が13名の兵士を伴い護衛してくれた[*33]。道中はほとんどミャオ族の集落となり，シナ人やシナ人との混血の集落が少なくなった。施平城を過ぎた海抜高度600メートルのところで水を汲んでいるミャオ族に出会った。かかるミャオ族は，これまで会ったミャオ族とは異なる容姿であった。すなわち，

> その風俗は，頭上に黒布を置き，耳には耳環を嵌め，頸には銀環を掛け，衣服は黒布で製し，腰まで垂れて居る。腰より以下は，台湾のツァリセン蕃の男子がやって居るような，膝の辺まで垂れる黒布の腰巻きを着けて居った。

このように，鳥居龍藏は容姿とくに女性が着用している衣服の色が異なっているミャオ族をみかけることになる。このミャオ族は，とくに着用しているスカートの色から黒ミャオ族と呼ばれている分派集団であった[*34]。鳥居龍藏が最初にミャオ族の集落に立ち寄り調査したのは，その先の黄平県の手前であった。すなわち，鳥居龍藏が十里墩という寒村を通過して少し行くと，ミャオ族の

集落があった。その集落を調査しようとしていたとき，黄平県からの出迎えの兵士2名に出会った。そこで，かかる兵士に同行を求めて，ミャオ族の集落に入った。集落名はミャオ語でイウトンといった。戸数は10戸ほどであった。家屋の屋根は草葺きで，室内の様子はシナ人の住居と異なることなく，また牛・豚などの家畜を飼育していた。集落内を見学していると，男女6，7名と数多くの子供が集まってきた。鳥居龍藏を珍しげにみているが，驚く様子がなくかえって喜んでいるようであった。その様子を，「その風俗及び人々の様子を見るに，何となく先年旅行した台湾の生蕃地の状態が想い起こされ，互いに相似通って居るように感じた」と記している。かように鳥居龍藏は，かかる観察において，ミャオ族を絶えず台湾の生蕃と比較していることはミャオ族調査の目的からも当然のことといえよう。さらに種々の調査を行なったが，調査内容は単語や語法にまで及んだ。しかし，同行の兵士たちが日没が近く，ミャオ族の土地なので危険であるなどといって集落を立ち去ることを催進したので，やむを得ず調査を打ち切り，離れた。

その後，鳥居龍藏は同様の調査を行ないながら，沅江に沿って西へ西へと足を進めた。この地域のミャオ族はすべて黒ミャオ族であったが，調査を実施してみると次のようなことが判明した。それは，日本を出発する際，ミャオ族は台湾の生蕃の如く，シナ人と交流がなく孤立した状態で生活しているものと考えていた。しかし，かかる風俗のみは固有の状態を残しているが，シナの感化をとくに受けていることであった。とりわけ，男性はまったくシナ化し，シナ人の男性と変わらないという印象をもった。

海抜高度1500メートルの沅江の分水嶺を越えると，住民は花ミャオ族と称されている分派集団がほとんどを占めることになった。衣服は黒ミャオ族と同様であるが，青色の素地の服を着用し，スカートに花柄模様の蠟纈染めの刺繍をしていた。このため，かかる集団は花ミャオ族と称せられることになった[*35]。花ミャオ族の女性は，黒ミャオ族とほぼ同様の頭髪や身体装飾をしていたが，男性は，

> 頭髪は，前頭部の額の上で丸めて，形を仁王の頭髪のように結び，その上より黒木綿で巻いている。衣服は上下二枚を着し，いずれも黒木綿を使用して居る。上着は筒袖であってその形は太い。襟は中央部にて釦を以て締め，裾はわずかに膝の所に達する長さに垂れ，その上から黒木綿の帯を締めて居る

という容姿で，足には脚絆を巻き，跣足のものもあれば草履を穿いているものもあった。かかる容姿は年齢に関係なく同じであった。

また家屋は柱が掘り立て，屋根は草葺きであるのが特徴で，日本の地方でよくみかけられる貧しい家屋のようであった。なお，屋内は狭く，寝所，囲炉裏，台所など3部屋に分かれていた。さらに生業に関しても，狩猟や漁撈に依存しているのではなく，農業が主体であり，上層のものは米（*Oryza sativa* L.）を常食とし，下層のものはトウモロコシ（*Zea may* L.）を主食にしているようであった[*36]。

貴州省の中心貴陽府に到着したのは10月17日であった。その後も鳥居龍藏は調査旅行を続行した。調査対象は青ミャオ族や白ミャオ族などのミャオ族の分派集団であった。その他に「フォンデッチ」（鳳頭鶏）と呼ばれている，先住民族ミャオ族を征伐するために派遣された漢族の屯田兵の集落，さらには紅岩山の山上にみられる古代文字の調査なども行なった。かかる古代文字は，作者に関して種々説があったが，鳥居龍藏はロロ族のものでないかと疑った。そこで，ミャオ族調査後直ちに帰国しないで遠廻りをして雲南省から四川省

にまで足を伸ばすことになった。かようなコースを採用したのは，古代文字がロロ族のものかどうか自らの眼で確かめたいからであった。なお，漢口に到着したのは翌年の 2 月 24 日であった。

以上ミャオ族調査出発の動機および調査の成果に関して，調査旅行中に遭遇したミャオ族の分派集団をとりあげ，検討した。かかる調査はほぼ成功裡に終了した。しかし，調査の目的とした台湾の原住民族あるいは先住民族とミャオ族が同一の祖先であるという点に関しては，今回の調査では確実な証拠が得られなかった。再度西南中国行きを希望していたが，東京帝国大学の許可が得られなかったこと，さらには対象が満州族や蒙古族などの北方民族により移ったため，出かけることができなかった。

4. 研究手法の特徴

前項では，西南中国ミャオ族調査を事例として，その動機と成果を調査行程に合わせて検討を加えてきた。以下では，かかるミャオ族調査の成果などを参照して，鳥居龍藏の研究手段の特徴を明らかにしていく。理由は，既に論じた如く，鳥居龍藏がわが国におけるフィールドサーヴェイの先駆者と看做されるからである。しかも，鳥居龍藏の調査に関する研究手法は，その後の海外におけるフィールドサーヴェイの規範となったと推察できるからである。

鳥居龍藏は，本稿では直接触れることができなかったが，海外でのフィールドサーヴェイと同様に，国内においても非常に精力的にフィールドサーヴェイを実践してきた（田畑 2007）。これら鳥居龍藏のフィールドサーヴェイの特徴の 1 つは，前項で論じたミャオ族調査が典型であるといえるのであるが，依頼ではなく自らの意志に基づくものがほとんどを占めていることである。そのため，何ら制約がなく，納得がいくまでの調査を行なうことが可能であった。この点と関連するのであるが，調査途中において研究対象とは別に興味あるいは疑問をもったものが存在すると，かかる新しい対象の解明を行なうというように調査に対して柔軟性が認められる点である。ミャオ族調査に関しては，古代文字の作成者の解明のため，ロロ族居住地域にまで足を伸ばしたことが，例として挙げられる。ロロ族は，現在でも外国人研究者は勿論のこと，国内の研究者も調査が非常に困難な少数民族である。かかる意味において，鳥居龍藏のフィールドサーヴェイの成果は非常に貴重なものといえる[*37]。

以上論じたように，鳥居龍藏は，多くの場合，自らの意志に基づいて研究テーマを選定し，フィールドサーヴェイを実施したのであった。とりわけ，海外でのフィールドサーヴェイは，日本人研究者として最初に訪問した地域が多かった。そのため，参照すべき先人による研究がほとんどなかった。それ故，調査に当っては，関連する外国語文献を出来る限り渉猟した。かように外国語文献に関心を有したのは，研究上の必要からであったが，幼少のころより，英語，フランス語，ドイツ語をはじめ種々の語学を主として独学で習得していたことも関係していると思われる。すなわち，書物からではあるが，研究対象民族や調査地域に関して，熱心に専門知識や情報を入手することに努めたのである。ミャオ族調査のために渉猟したのは，日本語文献（和書）4 論文，中国語文献（漢書）としては『史記』など正史も含まれるが主として地方誌 33 冊，欧米文献（洋書）は論文を含めて 35 編に及ぶ（鳥居龍藏 1907）。しかも，これらの文献に関してはその要約を数行程度行なっている[*38]。

かように，多数の文献を渉猟するとともに，研究対象民族や調査地域に深い知識や情報をもつ機関や研究者を訪問し，直接教示あるいは指導を受けることも忘れなかった。ミャオ族調査の場合は，上海総領事や岸田吟教授がこれに該当する。この

ように事前に下調べの作業を実施することは，既に指摘した川喜田二郎が主唱する野外科学では当然のことであり，基本的な研究ルールといえる。筆者の専攻している地理学においては，かかる作業は主として図書館や実習室など大学の研究室で実施するためインドアワークと称し，アウトドアワークと呼ばれるフィールドサーヴェイの前に行なうべき作業とされている（谷岡編 1964：14-15）。

その他，とくに鳥居龍藏が行なう海外でのフィールドサーヴェイについては，次のようなことも特徴の1つといえる。すなわち，鳥居龍藏が実施する調査地域の多くが交通の非常に不便な辺境地域であることにも関連するのであるが，例えば，身体計測器，写真機，高度計など当時としては最新の器具を携帯したことが挙げられる。かかる器具を使用することにより，より正確かつ客観的なデータの収集が可能となったのである。とくにミャオ族調査においては身体の各部を測定する身体計測器と，写真機が大いに役立った。前者の身体測定に関してはミャオ族の成人男性40名に実施し，詳細なデータを収集できた。また後者の写真機については自らが操作する技術を習得し，人物を中心に88枚の写真を残している（鳥居 1907　鳥居 1976c：222-265）。さらに，かかる写真に加えて，自らが描いた詳細なスケッチを多数残している。これらのスケッチは，写真とともに『苗族報告』の価値をより高めるものとなっている。かようにスケッチを上手に描けるようになったのは，幼少のときに親しんだ書物の中に絵入り辞典である『和漢三才図絵』があったことや，専門としている人類学や考古学においては採取した人骨や各種の遺物などをスケッチすることが必須であったことによると推察できる。

現地の調査は，以上述べたように，事前で収集した専門知識や情報あるいは最新式の調査器具などを活用して，入念に行なった。しかも，昼間調査した内容は調査記録という形式で文章として残しておいた。ミャオ族調査では，高度な内容をもつ専門的な学術書とは別に，これらの調査記録を参考にして一般読者向けの著作も刊行した。かかる著作は，多くの読者に読まれ，得られた印税が次回の調査の一部となった。かように，学術書および一般向け著作を刊行することで，調査内容を1人で独占しないで，研究者および一般の読者に還元すなわち分け与えるということも積極的に行なった。かかる「学問のオープン化」は，現在でも海外でのフィールドサーヴェイを実施している研究者にとっては銘記すべき点であるといえる*39。

さらに，鳥居龍藏のフィールドサーヴェイの特徴として忘れてならないのは，前述したように研究対象について入念かつ詳細な調査を実施したが，絶えず他の研究対象と比較すべき観点をもっていることである*40。つまり，研究対象を比較することにより，より客観的，具体的なものとして把握しようと努めた。ミャオ族に関しては，直前に調査を行なった台湾の生蕃との比較が随所にみられ，ミャオ族をより客観的，具体的に把握しようとする視点が強く感じられる。しかも，鳥居龍藏は，日本民族および文化の源流に大いなる関心を有していたので，日本民族および文化との比較も研究視野に入れていた。この点も，鳥居龍藏のミャオ族研究の研究手法の特徴といえよう。

以上論じた種々の研究手法は，その後の鳥居龍藏の海外でのフィールドサーヴェイについても該当する。しかも，かかる研究手法は非常にオーソドックスな手堅い研究手法でありるといえる。かかる意味からも鳥居龍藏は，わが国における海外でのフィールドサーヴェイの先駆者であるといっても過言ではないのである。

5. 結語――結びに代えて――

本論では，鳥居龍藏の西南中国ミャオ族調査を事例として論を展開してきた。論点を再度繰り返して論じる余裕をもたないが，次のことは明確に

断言することができる。すなわち，鳥居龍藏のミャオ族調査は，研究手法が海外でのフィールドサーヴェイにおける典型的な事例であるからである。その理由としては，第１に研究手法が海外でのフィールドサーヴェイの基本となるオーソドックスなものであること。第２にかかる研究手法が現在のフィールドサーヴェイにも充分適応可能であるという２点である。かような研究手法を用いて実施されたミャオ族調査は，長年にわたる鳥居龍藏の研究生活において以下の点にみられるような大転換となる研究史上画期的な調査であった*41。

① ヨーロッパ人研究者の顰みに倣って，ミャオ族調査についての専門書および一般読者向けの著作を作成している点である。それ以前の海外調査である遼東半島，台湾さらにはかかる両調査の間に行なわれた北千島調査については，論文という形式で専門誌などに発表されているが，纏まった著作は刊行されなかった。

② 台湾調査以前の調査においては，論文作成のために必要としたためか，調査終了後多くの外国語文献を収集したが，事前にはかかる作業を行なわなかった。これに対してミャオ族調査に関しては，調査に出かける前に出来る限りの外国語文献を渉猟して，研究対象民族や調査地域の知識や情報を入手していた。

③ 研究手法は恩師坪井正五郎の影響を多分に受けて，考古学を含む人類学的立場から調査に従事した。鳥居龍藏は，人類学の学問的領域を純然たる人類学（Anthropologie, Anthropology）と人種学（Ethnologie, Ethnology）および民族学（Ethnolographie, Ethnolography）に大きく２区分できると考えていた*42。現在では，前者の人類学は自然人類学（Physical Anthropology），後者の人種学および民族学は文化人類学（Cultural Anthropology）がほぼ該当する。当初フィールドサーヴェイは，前者の鳥居龍藏のいう人類学的調査を主体にしようと考えていた。ところが西南中国ミャオ族調査を実施すると，後者すなわち，鳥居龍藏のいう人種学および民族学的分野の方が重要であると看做すようになり，以降のフィールドサーヴェイにおいては，かかる分野の調査に集中することになった。

④ 研究対象民族が西南中国ミャオ族調査以降，南方に居住する民族集団から，満州族や蒙古族など北方に分布・居住する民族集団に大きく変更されることになった。この点に関しては，鳥居龍藏が主唱する日本民族「固有日本人説」と深く関連していると推察できる。つまり「固有日本人」は，満州が蒙古などの北東アジアから朝鮮半島を経由して日本列島に到着した民族集団であると推定しているからである。

⑤ 上記④と関連するが，鳥居龍藏の日本民族形成論は，北方から渡来した「固有日本人」を中核としつつ，その一部には既に本文でも論じたように，ミャオ族を筆頭とする南方系の諸集団の存在を想定している。つまり，西南中国ミャオ族調査は，日本民族の形成の枠組を設定するに際して基礎的な資料を提供したといえる。さらに，かかる日本民族および文化の形成にミャオ族など南方系の諸集団が関与していると唱える説は，その後の照葉樹林文化論に大きな影響を与えることになった*43（田畑 2013b：18）。

⑥ 西南中国ミャオ族調査までは，研究対象民族は，一部では狩猟などに従事していたが，農業を主体とした農耕民であった。これに対して以降の調査は，遊牧などを生業とする牧民が中心であった。すなわち，研究対象民族が農耕民から牧民へと変わる転換期でもあった。かかる点は，日本民族および文化の源流とも関連していると看做される問題を含んで

いると思われる。

以上論じたように，西南中国ミャオ族調査は，鳥居龍藏の研究において大転換をもたらす節目とでも称すべきものであった。かように重要な位置を占めるようになったのは，ミャオ族調査において，本論でも論を展開してきた如く，自らの研究手法が確立していたためであろうと推察できる。

このように，非常に豊かな研究成果をもたらしたミャオ族調査であったが，西南中国ではミャオ族だけではなく，続いて現在ではイ族と称せられているロロ族調査も実施している。本来であれば，ロロ族に関しても分析・検討を行なう必要がある。かかる点に関しては稿を改めて論じたいと念じている。

なお，鳥居龍藏の学説や主張が現在の学問的水準に照らすと，批判や検討を要する余地が存在するものも含まれている。この点については，本稿執筆の動機が鳥居龍藏の学問的業績を正当に評価することで，無視あるいは等閑視されることが多い学問的状況を克服したく思い，敢えて訂正や修正は行なわなかった。

註

＊1―拙著（田畑 2007：259）などにおいて度々指摘してきたように，川喜田二郎は，人類学および考古学などのフィールドサーヴェイやフィールドワークによって得られた資料を主体に研究を行なう学問分野を総称して野外科学（フィールドサイエンス）と命名した（川喜田 1967）。かかる川喜田二郎が提唱する野外科学に所属する学問分野としては，地理学，民族学，民族学（文化人類学）などが挙げられる。なお，川喜田二郎の野外科学の提唱は，科学の学問分野を従来の自然科学（理系）と人文・社会科学（文系）に2分する2分法に対して，研究室や書斎などで文献を主体に研究する書斎科学，実験でのデータを中心に行なう実験科学および上記の野外科学という，3区分する3分法である。

＊2―満州という用語などは，現在では使用することが避けられるべきとされている。しかしながら，本稿では鳥居龍藏のフィールドサーヴェイの手法を主内容としていることなどから，敢えて，これらの用語に関しては，例えば満州を中国東北地区と改変することなく，訂正は行なわなかった。

＊3―かかる点に関しては，第2次世界大戦以前あるいは大戦中において，当時わが国の東洋史や建築史研究をリードしてきた研究者が鳥居龍藏がフィールドサーヴェイを行なった地域に出かけている。しかしながら，これらの研究者については，鳥居龍藏のように戦争協力者というレッテルが貼られていない。

＊4―しかしながら，非常に奇妙に思われるのであるが，鳥居龍藏がとくに海外において収集した多数の考古学的資料および生活用具を中心とした民族学的資料などに関しては，没後約40年間を経過してから，東京大学総合研究資料館（1991年），国立民族学博物館（1993年），徳島県立博物館（1993年），北海道立北方民族博物館（1994年）など，わが国を代表する博物館や資料館において，鳥居龍藏に関する特別展が盛大に続々と開催され出した。しかしながら，これらの鳥居龍藏展は，博物館あるいは資料館で開催されたという性格から，鳥居龍藏が現地において収集した資料に限定された。すなわち，鳥居龍藏の研究業績や学問的評価に関する展示や紹介ではなかった。未だに鳥居龍藏の研究あるいは学問的評価については，無視あるいは等閑視され続けているという状況に関して大きな変化は認められない。とはいうものの最近，鳥居龍藏の自叙伝が文庫という形式で，研究者は勿論のこと，一般読者にも容易に入手することが可能となった（鳥居 2013）。それ故，近い将来において，かような学問的状況が改善され，鳥居龍藏に関する研究あるいは学問的評価に関しても，正当に検討されることが期待される。

＊5―かように，ミャオ族の分布・居住空間が非常に広範囲なのは，ミャオ族の民族性に起因すると推察できる。すなわち，ミャオ族の民族性とは，伝統的に主要な生業形態が焼畑農業であるからとされる。周知のように焼畑農業は，造成した

耕地が数年間しか使用できない。そのため，他の場所に新たなる耕地を求めて移動しなければならない。それ故，住居も1ケ所に定住することが出来ず，移動することになる。したがって上述した如く，生活空間が非常に広範囲とならざるを得ない。ただし，かように，現在においても移動生活を実施しているのは，主として雲南省中・南部を中心に分布・居住している，ミャオ族の中でも白ミャオ族（自称モン）と称される分派集団（亜集団）のみである（金丸 2005：281-367）。なお白ミャオ族同様，伝統的な主要生業形態が焼畑農業と狩猟とされるヤオ族の分派集団の1つである，盤ヤオ族に代表される過山ヤオ族も移動生活を実施してきた（田畑・金丸 1995：196-205）。

＊6―かように，ミャオ族が比較的日本人によく知られることになったのは，鳥居龍藏が当時の欧米の人類学研究者の顰みに倣ったからである。つまり，欧米の人類学は，とりわけ海外において調査した内容について，専門的な学術的な著作として刊行あるいは発表するのとは別に，一般読者を対象に調査日誌などに基づいた調査記録やエッセイを執筆し，それらの書物から得られた印税を次回の調査費用の一部に補塡していたからである。鳥居龍藏も，東京帝国大学理科大学に提出した専門的な調査報告書（鳥居 1907）以外に，一般向けの著作（鳥居 1926）を刊行している。

＊7―このように，照葉樹林文化論に対して非常に高い評価が与えられたのは，照葉樹林文化論の共同提唱者とでも称すべき，佐々木高明の影響が大であった。すなわち佐々木高明は，その著作（佐々木 1971）の中において，照葉樹林文化論の枠組を適応して日本の基層文化（Basic Culture）の形成を論じたからであると推察できる。

＊8―鳥居龍藏が日本民族の形成にミャオ族を筆頭に他民族集団が関与しているという見解は，第2次世界大戦前までは一般には受け入れられなかった。周知の如く，第2次世界大戦前までの日本の歴史教育は「皇国史観」と称された歴史観に統一され，他の歴史観は否定された。「皇国史観」では，日本民族は天皇を中心とした，世界でも類をみない万世一系の集団であるとされ，他の民族集団と交わっていない純潔民族であることが最大の特徴とされた。かかる点，つまり日本民族，ミャオ族を含め，種々の民族集団から形成されたという鳥居龍藏の主張は，上述の「皇国史観」とは相容れない立場であった。しかしながら，この点に関しては，拙論の中で論じた如く，「皇室，つまり天皇一族のみは，連綿として他の人びとと異なり，他民族と混血しないで同一の系統すなわち万世一系を継承しているからである」（田畑 2013b：17）と断言していた。それ故，鳥居龍藏は，「皇国史観」を主張する研究者などから面と向かって批判されなかったようである。

＊9―鳥居龍藏は台湾調査の第3回（明治31年 1898）と第4回（明治33年 1900）の間の明治32年（1899）に，東京帝国大学から命じられて，北千島列島古守島の調査を行なっている。調査は坪井正五郎の依頼によった。かかる北千島列島調査に関しては，拙論（田畑 1989）において論じたことがある。

＊10―以下，鳥居龍藏の台湾調査に関しては，鳥居龍藏の自叙伝（鳥居 2013：115-127）を参考にした。

＊11―その後，第3回台湾調査を実施した明治31年に東京帝国大学理科大学助手に採用され，正式の東京帝国大学教員となった。さらに，明治38年（1905）には同大学講師（専任），大正11年（1922）には同大学助教授に昇進した。かように，尋常小学校を僅か1ケ年しか通学しなかった学歴の鳥居龍藏が東京帝国大学の教員となったのは，恩師坪井正五郎の強力な推挙があったとしても非常に稀なケースといえる。

＊12―中国（中華人民共和国）では多数を占める漢族に対して，それ以外の非漢族（Non-Chinese）の民族集団を少数民族と称している。かかる少数民族は政府（国家）が認知した集団だけでも55に達する。台湾に分布・居住する原住民族あるいは先住民族と呼ばれている集団も，少数民族と称されている集団である。しかし，台湾に居住している，個々の集団がそのように称され

るのではなく，台湾に住むかような集団の総称として高山族（日本植民地時代は高砂族と呼ばれていた）と呼ばれている。すなわち高山族が中国の55少数民族の1つに数えられているのである。なお現在，台湾では少数民族という呼称が嫌われ，分布・居住しているかような集団は，尊重の意味を籠めて原住民族あるいは先住民族と称されることが多い。わが国で出版されているガイドブックなどでも，原住民族あるいは原住民という表現が使用されている。本稿では，既に使用しているように，研究対象が大陸部（本土）に居住する民族集団であることなどから，原則としては少数民族という用語を使用している。

＊13―鳥居龍藏は，台湾の原住民族あるいは先住民族について，本文にみられるように民族名の末尾に「蕃」という用語を付けて表わした。ミャオ族を筆頭に中国の大陸部に分布・居住する民族集団に関しては，その末尾に「蕃」ではなく，「族」を付けて表示した。このようにして，台湾と大陸部という。両地域の民族集団の所属を明確に区別できるように配慮したものと推察できる。

＊14―鳥居龍藏は「固有日本人」を日本民族の祖先と看做した。かかる「固有日本人」は，いわゆるアイヌ＝コロボックル（コロポックル）論争と称される日本民族起源論争の中で提唱された。鳥居龍藏は，恩師坪井正五郎の依頼によって行なった千島列島占守島の調査により，日本民族の祖先は坪井正五郎が強力に主張する，アイヌの伝説に登場するコロボックルではなく，対立する小金井良精が頑として主張するアイヌ説に傾いた。しかしながら，アイヌ説を採用することは恩義のある坪井正五郎を裏切ることになる。そこで，両説のいわば折衷案として提出したのが，弥生時代（紀元前4世紀頃－3世紀頃）に日本列島に渡来した「固有日本人」と名付けた集団であった。かかるアイヌ＝コロボックル論争に関しては拙著（田畑 2007：207-220）の中において論じたので参照されたい。

なお，水野裕によれば，上記のアイヌ，コロボックル，「固有日本人」，さらにはプレアイヌなどの各集団はすべて日本石器時人，すなわち日本列島の先住民族に関する説である。それ故，これらの論争は日本民族の起源についての論争ではなく，日本列島の先住民族のみに関する論争であるという見解も存在する（水野 1970：202-203）。

＊15―一般にはマレー人種と称される集団を指す。鳥居龍藏はマレー人種を2つの亜集団に区分する。その1つは固有マレーと呼ばれる亜集団で，シンガポール半島（マレー半島）やジャワ島に分布・居住している。かかる亜集団の特徴は，回教徒であり，アラビア文字を使用し，インド文化の影響を受けている。また文化程度も高い。他の亜集団はインドネジアンと称される集団である。特徴として男性は腰に褌，女性は腰巻きを纏い，首や手に輪をはめている。さらに男性は腰に刀を提げ，男女とも跣足であることが挙げられる。つまり古いマレー人種の形式を守っているといえる。また文化程度は極めて原始的である。かかる集団には，スマトラ・ボルネオ両島さらにはフィリッピンや台湾などの先住民族が所属する。その中でも，日本民族の形成に関与したと想定されるのは，後者のフィリッピンや台湾など日本列島周辺に分布する集団である（鳥居 1925　鳥居 1975：388）。また鳥居龍藏は，かような特徴を有するインドネジアンは，単純に日本列島に渡来したのではなく，縮毛をもつネグリトーと混血した集団がやって来たと推定している。そのため，日本民族の一部にも縮毛の人びとがみられるのであるという（鳥居 1925　鳥居龍藏 1975：388-389）。

＊16―かかる集団の代表はミャオ族であるとする。ミャオ族の最大の特徴は，わが国にも出土する銅鐸を所有している点であるとする。また日本民族の身長が低いのは，この集団の血統を引いているからであると推察している（鳥居 1925　鳥居 1975：390）。

＊17―周知の如く，鳥居龍藏の海外での最初のフィールドサーヴェイは，明治28年（1895）に実施した遼東半島調査であった。かかる調査は，「実にこの行（遼東半島調査のこと―筆者註）こそ私の将来を支配する基礎となった」（鳥居 2013：

111）と述べているように，鳥居龍藏にとって，それ以降の海外での調査・研究の方向性を決定すべきものであった。しかし，調査内容に関しては，ドルメン（Dolmen，支石墓）の発見など多くの成果がみられたが，予察的なものであった。なお鳥居龍藏は，「鳥居さんのドルメン」と研究者間で称されるほど，ドルメンについて非常に強い興味・関心を有していた。そのためか，郷里近くの徳島県鳴門市妙見山上にある鳥居龍藏の墳墓（元鳥居龍藏記念博物館の裏）はドルメンの型をしている。

＊18―以下，鳥居龍藏のミャオ族調査に関しては，自叙伝（鳥居 2013：177-201）および主として一般読者を対象とした調査記録（鳥居 1926）を参照した。なお，かかるミャオ族調査については拙論（田畑 1991　田畑 1997：43-48）において論じた。それ故，本稿では事実関係あるいは原著からの直接引用などの一部が拙論と重複している箇所も存在することを断っておきたい。

＊19―清王朝（1616-1912 年）同様，日本植民地時代の台湾では，原住民族あるいは先住民族，つまり少数民族の中で，中央政権に馴染まない，教化されていない集団に対して呼ばれた名称。これに対して，教化された集団は熟蕃と称されて保護の対象となった。現在では差別用語として使用が避けられている。

＊20―‘The Geography Society’ の日本語名称。同協会は，社長北白川家の下に当時の代表的な実業家で後に東京帝国大学総長になった渡辺洪基や榎本武揚などを中心に運営された。鳥居龍藏も同行する予定であった，東京帝国大学理科大学教授神保小虎の遼東半島調査は同協会から調査依頼された。なお，同協会の日本での正式名称が「東京地理協会」ではなく「東京地学協会」となっているなどの成立事情に関しては，石田龍次郎の著書（石田 1984：91-98）に詳しい。

＊21―ミャオ族を中心とする西南中国調査に関しては，前記註＊18 でも述べたように，鳥居龍藏の著作（鳥居 1926　鳥居 2013）を参考にした。本来であれば，引用あるいは参照した箇所はすべてページ数を含めて該当する箇所を明示すべきであるが，煩雑になることなどを考慮して，直接引用の箇所のみページ数を示した。

＊22―通事は，漢口の日本郵便局に勤務していた漢族で，勤勉で稀にみる優秀な人物であると鳥居龍藏の評価が高かった。しかし，その名前が王（鳥居 1926　鳥居 1976b：492）と記されていたり，あるいは張（鳥居 2013：178）と書かれていたりして特定できなかった。なお鳥居龍藏は，ミャオ族調査時代においては本文にみられるように，通事を雇っていた。それ故，当時はシナ語学の日常会話は充分にできなかったのではないか，と推察できる。しかし，第 2 次世界大戦中から戦後にかけて，北京の燕京大学客座（客員）教授に就任していることなどから，その後独学でシナ語を習得し，日常会話は支障なく話せるようになっていた。

＊23―清国では科挙の試験に合格して官使に採用されると，生地で任官することができず，他省に行かねばならなかった。同乗した官吏は出身が東部の浙江省であるが，かかる規定なのではるばる遠方の雲南省に唯 1 人で出かけるところであった。

＊24―砲艦の乗組員は艦長 1 名，水夫 12・3 名で，船首には旧式の砲一門を備えていた。また艫部には青竜刀や兵旗が靡いていた。さらに船首には「東京帝国大学堂教習」という毛筆で書かれた大白旗が立てられていた。船頭によれば，海賊からの襲来を避けることや，他船が前を遮ることを防ぐことに効果があるという。

＊25―同様の鵜飼漁は，現在でも揚子江上流の支流や珠江に流れ込む西江上流都柳江でもみることができる。しかし非常に少なくなっている。鳥居龍藏がみた鵜飼は，鵜にロープを付けないで行なう「放ち鵜」と称される漁法であったと推定できる。わが国では，かかる漁法は現在ではみられず，『万葉集』の中で登場する漁法である。

＊26―扁額の「滇」は雲南，「黔」は貴州のそれぞれの省の略称である。全省や自治区ではかように漢字 1 文字で表示する習慣がみられる。現在でも車両のプレートナンバーに省や自治区を示す略称が使用されている。

＊27―食事する場所は土間で，数台のテーブルが置かれ，その上に皿と箸が備え付けられているとい

う非常に簡素なものであった。また隣室が炊事場なので，そこから漏れる悪臭が鼻に付き，堪えることができない状態であった。かかる当地の飲食店は，わが国の一杯飯屋の姿を彷彿させた。

＊28―これら待機していた兵士は，全員が胸にその所属隊の営名を記した赤色の軍服を着用し，麦藁帽を被っていた。また足には脚絆を巻き，草鞋を穿いていた。かかる兵士の服装をみて，鳥居龍藏は，国家の干城である軍人の姿とはとても受け取ることができないと思った。

＊29―鳥居龍藏の著書（鳥居 1926　鳥居 1976b：256）では10月3日と記されている。しかし，前後の文章などを判断すると，かかる鳥居龍藏の記述は1日ずれており，10月4日が正しいと思われる。それ故，本稿では10月4日に改めておいた。

＊30―かかる兵士は，各々肩に青竜刀ではなく銃を掛け，服装も比較的立派であった。このように銃を携帯した兵士をみたのははじめてであった。

＊31―旅行者が宿泊する旅館の名称。多くは寝室を客に貸すだけで食事は各自が調理するのが建前である。夜具は寝室に藁を敷いただけである。しかし鎮遠府で泊った一品客桟は1人毎に寝台があり，壁には雲竜の画が掛けられ，床には大理石が飾ってあるなど風雅が感じられた。かかる一品客桟は，鎮遠府で屈指の旅舎であることが後で判明した。

＊32―かかる貴州省や雲南省で飼育されている馬は，中国の一般の馬と違い，ミャオ族が飼養した特殊な性質をもつとされる。この点については漢籍にもみられ，山間部に居住するミャオ族はすべてこの馬を利用している。

＊33―以降府が変わるごとに，それぞれの府知事が護衛のための兵士を付けてくれた。これらの兵士は，治安の確保と共に道案内も兼ねていた。

＊34―鳥居龍藏は，西南中国ミャオ族調査に基づいて，ミャオ族の分派集団（亜集団）を下表（第1表）のように5区分した。

当時ミャオ族には分派集団が存在していることが知られていた。しかし一部のミャオ族を除外すれば，ミャオ族は長年移動していないので，他の分派集団に関しては知ることが少なかった。鳥居龍藏は，ミャオ族の居住地域をほぼ全域踏査したので，ミャオ族の分派集団の全貌を知ることができた。なお，かかる区分は，視覚からも判別しやすいので現地で使用されている。しかし，非科学的であるという理由などから，研究者間では言語系統別の区分が使用されている。

＊35―花ミャオ族という名称は，黒ミャオ族など他の分派集団にも該当するのであるが，漢族が便宜的に名付けた他称である。花ミャオ族の自称はコ・ション，黒ミャオ族の自称はムーといい，分派集団ごとに異なっている。

＊36―トウモロコシの起源地はアメリカ大陸であるとされる。それ故，トウモロコシが西南中国に導入されたのは，16世紀ごろではないかと推定されている（星川 1978：38-39）。したがって，それ以前はシコクビエ（*Eleusine coracana* Gaertn.）やアワ（*Setaria italica* Beauv.）などが米とともに主食であったと推察できる。

＊37―筆者は，短期間があるがロロ族の最大の集結地である四川省大凉山地区に出かけ，伝統的な生業形態に関する調査を実施したことがある。

＊38―台湾に関しても外国語文献が皆無といえる状態

第1表　ミャオ族の分派集団（亜集団）

分派集団	特色	主要分布地域
青ミャオ族	青色のスカートを着用	貴州省中央部
黒ミャオ族	黒色のスカートを着用	貴州省東南部
紅ミャオ族	赤色のスカートを着用	湖南省西部・貴州省東部
花ミャオ族	花柄の蠟纈染のスカートを着用	貴州省西部・雲南省・インドシナ半島北部
白ミャオ族	白色のスカートを着用	貴州省中央部・南部

〔出所〕鳥居龍藏（1907）「苗族調査報告」，東京帝国大学理科大学人類学教室，鳥居龍藏（1976c）「鳥居龍藏全集　第11巻」，朝日新聞社，44頁などを参考にして作成.

であった。そこで論文作成に当たり，所蔵していた若干の文献の他，専門書，学術論文合わせて 50 編ほど注文した（鳥居 1905）。

＊39―現在でもかような「学問のオープン化」は当然のことであるが，それだけでなく，研究対象とした集団にその調査内容を還元することも要求されている。

＊40―といっても，比較に関しては同一規準のもとで実施する必要がある。ミャオ族調査では少数民族という規準で台湾のツァリセン蕃との比較を行なった。

＊41―同様の指摘は大林太良が一般の読者を対象とした鳥居龍藏の著作の解説の中で行なっている（大林 1980：301-303）。本稿もかかる大林太良の指摘を大いに参考にした。

＊42―この間の事情は，鳥居龍藏の論文（鳥居 1913）に詳しい。本稿も同論文を参考にした。

＊43―同様の視点から，大林太良は，鳥居龍藏の西南中国ミャオ族調査などの成果が，代表的な日本民族形成論である岡正雄の提唱する日本民族の基礎構造に多大の影響を与えたと論じ，鳥居龍藏のかかる分野での先駆的業績を高く評価している（大林 1975：127-130）。

引用文献

石田龍次郎（1989）「日本における近代地理学の成立」，大明堂.

岡崎敬（1976）解題，鳥居龍藏（1976a）「鳥居龍藏全集　第 6 巻」，朝日新聞社，657-673.

大林太良（1975）〔ヒトと学問〕・鳥居龍藏の日本民族形成論，社会人類学年報，創刊号，121-132.

大林太良（1980）解説，鳥居龍藏「中国の少数民族地帯をゆく」，朝日新聞社，297-310.

川喜田二郎（1967）野外科学の提唱，自由，**9**-5，10-21.

金丸良子（2005）「中国少数民族ミャオ族の生業形態」，古今書院.

Clarke, Samuel, R.（1911）*Among the tribes in South-West China*, China Inland Mission, London.（Republished by Ch'eng Wen Publishing Company, Taipei 1976）

佐々木高明（1971）「稲作以前」，日本放送出版協会（NHK ブックス）.

田畑久夫（1991）鳥居龍藏と西南中国の少数民族―ミャオ族調査を中心に―，日本文化史研究，**14**.

田畑久夫（1997）「民族学者　鳥居龍藏―アジア調査の軌跡―」，古今書院.

田畑久夫（1998）鳥居龍藏と北千島―調査記録よりの分析―，昭和女子大学文化史研究，創刊号，田畑久夫（2007）「鳥居龍藏のみた日本―日本民族・文化の源流を求めて―」，古今書院，179-222.

田畑久夫（2006）イ族の木地製作―四川省凉山彝族自治州美姑県侯古莫郷を事例として―，昭和女子大学文化史研究，**13**，1-26.

田畑久夫（2007）「鳥居龍藏のみた日本―日本民族・文化の源流を求めて―」，古今書院.

田畑久夫（2013a）鳥居龍藏と満州―第 2 回満州調査を事例として―，昭和女子大学文化史研究，**16**，154(1)-121(34).

田畑久夫（2013b）鳥居龍藏の東部シベリア調査―日本民族・文化の源流を求めて―，民俗と歴史，**31**，1-28.

田畑久夫（2014a）鳥居龍藏の歴史認識―『有史以前の日本』改訂版を通して―，昭和女子大学文化史研究，**17**，150(1)-113(34).

田畑久夫（2014b）西南中国エクスペディション（探検）の先駆者―デーヴィスと鳥居龍藏―，民俗と歴史，**32**，1-25.

田畑久夫・金丸良子（1995）「中国少数民族誌　雲貴高原のヤオ族」，ゆまに書房.

谷岡武雄編（1964）「人文地理ゼミナール　新訂地理実習」，大明堂.

Davis, H. R.（1909）*Yün-nan: the Link between India and the Yangtze*, Cambridge: at the Univ. Press, London.　田畑久夫，金丸良子編訳（1989）「雲南―インドと揚子江流域の環―」，古今書院.

鳥居龍藏（1905）台湾生蕃に就ての参考書，東京人類学会雑誌，226，鳥居龍藏（1976c）「鳥居龍藏全集　第 11 巻」，朝日新聞社，405-408.

鳥居龍藏（1907）「苗族調査報告」，東京帝国大学理科大学人類学教室，鳥居龍藏（1976c）「鳥居龍藏全集　第 11 巻」，朝日新聞社，1-280.

鳥居龍藏（1913）人類学と人種学（或は民族学）を分離すべし，東亜之光，**8**-9，鳥居龍藏（1975）「鳥居龍藏全集　第 1 巻」，朝日新聞社，480-486.

鳥居龍藏（1925）「有史以前の日本　改訂版」，磯部甲

陽堂，鳥居龍藏（1975）「鳥居龍藏全集　第 1 巻」，朝日新聞社，167-454.
鳥居龍藏（1926）「人類学上より見たる西南支那」，冨山房，鳥居龍藏（1976b）「鳥居龍藏全集　第 10 巻」，朝日新聞社，219-521．なお同書は，一部を省略して鳥居龍藏（1980）「中国の少数民族地帯をゆく」，朝日新聞社（朝日選書）として復刊されている。
鳥居龍藏（1936）「考古学上より見たる遼之文化図譜　第 1 冊～第 4 冊」，東方文化学院東京研究所.
鳥居龍藏（2013）「ある老学徒の手記」，岩波書店（岩波文庫）．親本は鳥居龍藏（1953）「ある老学徒の手記ー考古学とともに六十年」，朝日新聞社である。鳥居龍藏（1976 d）「鳥居龍藏全集　第 12 巻」，朝日新聞社，137-348.
中尾佐助（1966）「栽培植物と農耕の起源」，岩波書店（岩波新書）.
星川清親（1978）「栽培植物の起源と伝播」，二宮書店.
Hosie, A.（1890）*Three Years in Western China: A narrative of three journey in Ssŭch'uan, Keichow and Yün-nan*, George Philip and son, London.
水野裕（1970）「日本民族文化」，雄山閣.

（たばた ひさお　生活機構学専攻 教授）

受理年月日　平成 26 年 9 月 30 日
審査終了日　平成 26 年 12 月 3 日